

がんは怖い。それが父の率直な気持ちだった。父の両親はともがんで他界しており、晩年のやせ細った姿を父はいつまでも記憶していた。「余命数か月なんて宣告されるより、何も知らされないほうがいい」それが父の意見だった。だから、父は人間ドックを絶対に受けようとしなかった。

「人間、知らない方がいいこともあるんだ」

これが父の人生論だった。多くの病気は早期発見で対応できるのだが、父はその早期発見を非常にいやがった。病気が軽い状態で見つかるより、手遅れで見つかった方が幸せだ、とすら考えているようだった。

家族としては、父に人間ドックを受けてほしかった。自営業の父である。会社員と違って、定期的な健康診断の義務がなく、身体に不調がない限り、何年でも検査に行かなかった。

「自分の身体は自分が一番よく分かる。具合が悪かったら、自分で病院に行くから」

心配する家族に対して父はそういうのだが、父にその気がないことはみんなわかっていた。

「お願いだから人間ドック受けてよ」という周囲からの懇願がうつつとうしかったからそういったままで、本当は具合が悪くなってもギリギリまで病院に行かないのは明らかだった。

怖いのは病気になることじゃない。病気が見つかることだ。それが父の基本姿勢だった。ヘタに人間ドックを受けて「あなたの身体に異変が見つかりました」となれば、大好きな煙草も酒もやめなければならなくなるかもしれない。場合によっては、マージャンやパチンコもできなくなるかもしれない。それは父にとって「病気の手遅れ」よりも怖いことだった。

そんな父が七十歳を過ぎたころ、ある人から助言を受けた。父とは五十年以上の付き合いであり、母や息子の私より長い付き合いの親友からだった。

自動車の運転免許試験場で知り合ったという、今では考えられない知り合い方で交際が始まったその男性とは、いつも車の話で盛り上がり、父もその男性も車が三度の食事より好きとあって、何時間でも車のお話を

続けられるのだった。

ある日、その男性がこんなことを父に言ったという。「俺も七十歳を過ぎた。人によっては運転免許を返納する年齢だ。いつまでも元気で運転を続けるためには、いつまでも健康でいなければならぬ」

そして、
「そのために、毎年一回、人間ドックを受けている」と告げた。父は、

「人間ドックなんてばからしい。病気なんてものは、手遅れになってから見つかるぐらいがちょうどいいんだ」と強弁したらしいのだが、友人にこうさとされたのだという。

「俺たちの大好きな車だって、定期的に車検に出すだろう。車検に通っていない車は車両と見なされていないからだ。車を所有し、運転する以上、必ず定期的に車検に出す。これはみんな知っている義務だ。ひとの身体もそれと同じで、定期的に検査しなければならぬ。自分は心理的に納得できなくても、そうすることが家族を持っている一家のあるじとしての義務であり、ルールだからだ」

たとえを車にしたのが良かったのかもしれない。父は反論することなく、友人の意見を聞いたという。

なにしろ五十年の付き合いである。家族よりも長く付き合い合っているのだ。その友人からのアドバイスは、父の心を動かしたらしい。

「そうか。人間ドックは車検か」
父は、

「そういう考え方もありかもな」とつぶやいたあと、静かに納得したという。

この話はあとになってその男性から聞いたのだが、「キミのお父さん、分かりやすいたとえ話をすると、案外きちんと納得するんだよ」と笑顔で教えてくれた。

父は今でも人間ドックを怖がっている。喜んで受けているわけではない。それでも、

「車検じゃしょうがねえなあ」
などつぶやいては、年に一回きちんと受けている。

父を上手に説得してくれたあの友人男性には今でも感謝している。父のエンジンが今日も好調なのは、人間ドックのおかげなのだ。